

## 第12章 2. ヨーロッパの再編 d、フランス第二帝政と第三共和政

①皇帝[1 **ナポレオン3世**]の政治=外交・軍事の華やかさにより権力を維持

- 1)産業育成=万国博覧会の開催、[2 **パリ大改造**]の実施
- 2)各地を侵略
  - 1853~56 [3 **クリミア**]戦争、1859 [4 **イタリア統一**]戦争
  - 1862 [5 **インドシナ**]出兵
  - 1856~60 [6 **アロー**]戦争、日本→江戸幕府と結ぶ
  - [7 **メキシコ出兵**]に失敗、挫折

②[8 **プロイセン=フランス**]戦争でプロイセン軍に逮捕される(1870)→第二帝政の崩壊  
→1870、9 臨時政府の成立=[9 **労働者など民衆**]が中心となる

③1871ドイツと結んだ屈辱的な講和条約に反対するパリ民衆の蜂起→[10 **パリ=コミュン**]を樹立  
世界初の労働者政府、[11 **社会**]主義のモデルとされる。

**パリ=コミュン** …[12 **1871**]年、[13 **プロイセン=フランス**]戦争の講和条件をめぐって、パリ民衆が蜂起し、樹立した自治政府。72日間持続したがドイツと結ぶ臨時政府によって弾圧される。社会主義者を指導者とし労働者や小市民が中心となっており、世界初の[14 **社会**]主義政権とされている。

[15 **1848**]年の2月革命とそれにつづく政局不安のなか、12月の大統領選挙に当選したのが[16 **ルイ=ナポレオン**]である。かれは、1851年にはクーデターで独裁権を獲得、ついで皇帝となり[17 **ナポレオン3世**]と称した。([18 **第二帝**]政)  
彼はその後、叔父をまねてクリミア戦争、アロー戦争、イタリア統一戦争などの戦争をつづけ、インドシナ出兵をおこした。他方、国内産業の育成のため万国博覧会を開いたり、パリの整備を行なった。しかし[19 **メキシコ出兵**]で挫折、1870年[20 **プロイセン=フランス**]戦争でプロイセンに降伏、第二帝政は崩壊、かわって[21 **第三共和**]政が成立、プロイセンとの戦いを指導したが敗れた。  
しかしドイツ(プロイセン)との講和条約の内容に反対したパリ市民は世界初の労働者政府とされる[22 **パリ=コミュン**]を樹立したがドイツと結ぶ臨時政府によって弾圧された。

④1875 共和国憲法制定→[23 **第三共和政**]の確立=不安定な政局続く  
小政党の連立政権が中心←→[24 **対独復讐**]を唱える軍部カトリック王党派など保守派と対立

- 1)1887~89 [25 **ブーランジェ**]事件=軍部のクーデター未遂事件
- 2)1894~99 [26 **ドレフス**]事件=反ドイツ、反ユダヤ意識をあおる  
→文豪ゾラの批判、シオニズム運動のきっかけに **ヘルツル**

シオニズム…27 **ユダヤ人が自分達の国をパレスティナに建国しようという運動**

### e. ヴィクトリア時代のイギリス

①二大政党時代

自由党の[28 **グラッドストーン**]と保守党の[29 **ディズレーリ**]が交互に政権を樹立  
→内政重視の傾向 →[30 **植民地**]獲得など積極外交を展開

- 選挙法改正(第二回 1867、第三回 1884)により選挙権拡大=男子普通選挙に接近
- 教育法=国民教育の充実、労働組合法=組合運動の合法化

②[31 **アイルランド**]問題の深刻化  
支配層(地主)=[32 **プロテスタント**]系住民と多数派[33 **カトリック**]系住民の対立続く

二度にわたる[34 **アイルランド自治法**]の否決→1914年に成立するが延期される

③イギリスの国際政治 …[35 **「世界の工場」**]としての経済力と、圧倒的な[36 **海軍力**]を背景に世界に[37 **自由貿易**]を強要

④1870年代~ [38 **帝国主義**]政策の強化  
1)1875[39 **スエズ運河**]の株の大半を獲得(ディズレーリ内閣)、1877インド帝国を樹立

2)[40 **ジョセフ=チェンバレン**]植民地相(1895~)→国内問題解決のため[41 **植民地**]を必要とする  
・植民地拡大をめざし[42 **南アフリカ**]戦争を支援

⑤労働者政党結成の動き…[43 **フェビアン**]協会、労働組合など→1906[44 **労働**]党結成  
漸進的な改革による社会主義実現を目指す

19世紀中期から後期にかけての[45 **ヴィクトリア**]女王のもとで(1837~1901)にイギリスは全盛期をむかえた。トーリー党は[46 **保守**]党として地主、貴族らを基盤とする政党に、ホイッグ党は[47 **自由**]党として産業資本家中心の政党となり、自由党[48 **グラッドストーン**]、保守党[49 **ディズレーリ**]が交互に政権につく二大政党時代をむかえた。このなかで二度の[50 **選挙法改正**]で普通選挙が実現、教育法や労働組合法などの民主的政策も進んだ。  
対外的には植民地獲得の[51 **帝国主義**]政策の方向をつよめた。1875年の[52 **スエズ**]運河株買収や1899~1902年の[53 **南アフリカ**]戦争がその画期とされる。  
他方、国内では[54 **アイルランド**]の自治権賦与の問題が深刻化した。また1884年ウェブ夫妻らが結成した漸進的な社会主義をめざす[55 **フェビアン**]協会と労働運動が合流、1906年[56 **労働**]党が成立する。